

# 池田本源氏物語・甲筆書写卷をめぐる

文化科学研究科・日本文学研究専攻 大内 英範

## はじめに

国文学研究資料館のWEBサイト内、「国文学論文目録データベース」での検索によれば、二〇〇三年に発表された源氏物語に関する論文は、三六一件であるという。平安時代の散文作品の双璧ともいえる枕草子に関する論文が三六件、そのほか土佐日記関連一三件、蜻蛉日記関連三四件、古今和歌集関連六三件であって、平安文学の研究の中で、源氏物語に関する論文数の突出ぶりが理解できよう。時代を広げても、万葉集関連の二二三件というのが目をひくものの、単純に作品別の論文数という視点からみた場合、古典研究の中において最も活況を呈しているのが、源氏物語研究であるといつてよいのだろう。

源氏物語に関するそれら多くの論文は、自らが扱ってたつ源氏物語本文について、どの程度の自覚を持っているだろうか。すべて調査したわけではないが、現在、源氏物語に関する論文は、全集本、新全集本、新大系本のいずれかの本文に拠ることがほとんどであろう。一五世紀書写の大島本を主底本とする、それら主要な校注本の本文による作品研究が、活発におこなわれている。すなわち、本文については、それらの学恩に依存することを研究者間の共通の了解事項とし、本文批判の段階を経ずに作品を研究対象とすることができるという、ここ半世紀ほどで確立された研究環境が、作品自体の持つ奥行き深さと

ともに、前述のような活況を呈する現在の源氏物語研究の状況を支えているのである。

しかし、そのような研究の進展は、緻密な読みの蓄積による内容理解の深化をもたらす一方で、より細部へと目を向かわせ、結果、細微な表現の読み込みによる作品論も多くなっている。そうした中で、極端な場合、ある用例が、ある巻に一例あるかないかということの問題にしながら、作品全体を論じるケースもある。もし、その一例が、大島本以外の写本で、異同によって見出すことができない（あるいは見出すことができる）ことがある場合、その源氏物語「論」には、どのような意味があるのだろうか。そこまで目配りをしている論考があるだろうか。

多くの場合、現在の源氏物語研究は、全集本（または新全集本、新大系本）源氏物語の研究であり、それらの主底本である大島本源氏物語の研究であるともいえる。大島本が現在の「流布本」の地位を占めるきっかけとなったのは、いうまでもなく『校異源氏』および『源氏物語大成』であった。池田亀鑑は、「約三万冊の伝本を比較、調査を繰り返した結果」、大島本を「青表紙本系統の最善本」と位置付け、『校異源氏』および『源氏物語大成』の主底本としたのである。

その後、もちろん例外はあるものの、「最善本」たる大島本を主底本とした校注本を用いて、表現を享受し、解釈する方向での研究が主流となったのである。それによって、確かに分厚い「読み」の蓄積がな

されてきた。しかし、一方で、そのことが、源氏物語の本文研究を停滞させる結果となったことも確かである。他本との異同をあれこれつづくよりも、大島本にみられる表現をどう解釈するか、関心はひたすらその方向に向けられていたのではないか。もちろん「約三万冊の伝本を比較、調査」した人物は、おそらく池田亀鑑以外にはおるまい。『校異源氏』および『源氏物語大成』を前に、源氏物語の本文研究は一応の結論をみたという前提に立つのが、共通理解として存在したとしても無理なからぬところか。

しかし、現在では池田亀鑑の三系統論にも疑義が提出され、再検討の必要性が唱えられてもいる(注1)。そうした中では大島本に与えられてきた「最善本」の地位も再考せざるを得なくなるであろう。

今後は、これまであまり目を向けられてこなかった、大島本以外の伝本についても、その本文の研究をより進めていくことが重要である。そして、中村一夫のいうように、「異同そのものに着目して、なぜそういう異同があるのか、その異同からどういうことが考えられるのか」ということを検討しなければならぬ(注2)。

現在、大島本の書写よりも古い時代の写本がいくつも知られている。鎌倉期書写巻を基幹とするセットもいくつか伝存しているのである。しかし、藤原定家や源親行らが参照したような平安期写本はまだ見つかっていない。しかし、現存最古写の時期となる鎌倉期の写本群を中心に、その親本の姿を推定し、限りなく平安期写本の姿に近づくことができないうか。それは同時に、定家や親行らによる鎌倉初期の本文整理事業の実態解明にも資するところが大きいであろう。今後そうした点からの、鎌倉期写本の研究が期待されるのである。

本稿では、現在わかっている鎌倉期写本の中では、オリジナルのセットとしては最も多くの巻を残す天理図書館蔵池田本の書写態度及び、そこからその親本の状態をどの程度まで推定し得るかについて検討し

たい。

## 一、桐壺巻の書写態度——明融本との親近性——

池田本は花散里と柏木の二巻を欠き、帚木と空蟬、蓬生と関屋、常夏と篝火がそれぞれ一冊となっているために五二巻四九冊本となる。そのうち賢木、東屋、蜻蛉、手習の四巻が補写であり、本来のセットとしては四八巻四五冊が残っていることになる。この四八巻四五冊は岡寫偉久子によれば鎌倉後期の書写であり、二人の手によって書写されたものである(注3)。岡寫に倣って二人の書写者をそれぞれ甲・乙とすると、甲筆書写は三六巻、乙筆書写は一二巻となる。本稿では甲筆書写巻を中心に検討する。

まず桐壺巻について検討したい。

桐壺は甲筆書写巻である。池田本の本文は大島本、明融本等の本文とよく一致する。特に池田本と明融本は極めてよく一致する。このことから、しばらく特に明融本との比較を中心に考えてみたい。

実際に本文を見てみよう。試みに大島本を含めた三本の冒頭部を示す。

【資料1】大島・明融・池田、三本の桐壺冒頭部

(池) いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかに  
いとやむことなき、はにはあらぬかすくれて時めき給あり  
けり

(明) いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかに  
いとやむことなき、はにはあらぬかすくれて時めき給あり  
けり

(大) いつれの御ときにか女御更衣あまたさふらひ給ひける中に

いとやんことなききははあらぬかすくれてときめき給ふ  
有けり

漢字仮名遣いの違いを除けば三本の本文はまったく同じであり、池田本と明融本の二本では漢字仮名遣いまで同じであることがわかる。これは冒頭部のみを示したものであるが、桐壺に関してはこの三本は巻末に至るまでほぼこのような状態で一致をみる。やはりこの三本は非常に近い本文を持っているといえるであろう。

また、以下に池田本の訂正箇所の一部を掲げる。

【資料2】池田本桐壺・訂正箇所（一部）。+は補入を表す。番号は別本集成）

もてなやみくさに「大明」…010086  
もてなやくさに／や+み「池」  
なり行に「大」…010091  
なりゆくに「明」  
ゆくに／+なり「池」  
おもほしをきてたれは「大明」…010231  
おもほしをきてたれは／お+も「池」  
くらつかさ「大明」…010392  
つかさ／+くら「池」  
まかてなんと「大明」…010446  
まかてなど／な+む「池」  
いみしと「大明」…010563  
ナシ／+いみしと「池」  
おもほしなから「大明」…010605  
おもほしなから／お+も「池」

もてわつらひ「大明」…010739  
もてわらひ／わ+つ「池」

ちなみにすべての本文訂正箇所は合計五一箇所である。池田本には、巻にもよるが、後人による書き入れなども見られ、このような訂正箇所についても、本行書写者による訂正か否かを本来一つずつ丁寧を検証してゆく必要がある。たとえば一例め、池田本は本行に「もてなやくさに」とあって「や」のあとに「み」を補入して「もてなやみくさに」という、明融本などと一致する本文に訂正している。この「み」の字は、本行の別の箇所にある「み」の字と全く同一の字形であり、少なくともこの箇所は、本行書写者による訂正と考えられるのである。このことは、本行書写者甲が積極的に本文訂正をおこなっていたことを示しているといえよう。もちろん判断に窮する箇所もあり、今後さらなる精査を必要とするが、とりあえず桐壺巻の本文の訂正箇所については、そのほとんどが本行書写者によるものと推定している。他の例からも、これら訂正本本文は、訂正の結果が大島本や明融本と一致するようになっていることがわかる。池田本訂正箇所五一箇所中、対応する明融本にも訂正がある一箇所を除いた五〇例が池田本訂正後の本文が明融本本文と一致するのである。

結局池田本と明融本とで、対立する箇所は、助詞一文字の有無などを除けば一箇所、大島本と明融本が「おはしませと」とするのを池田本が「ましませと」とするところだけとなる（文節番号011906）。

さらに、以下は池田本に記された振り漢字と振り仮名である。

【資料3】池田本桐壺・振り漢字・振りかな（＝は傍記を表す。）

かうろくわんに「大」…011973  
こうろくわんに／＝鴻臚館「池明」

御むすめ「大」：012629

おほん女／女〓ムスメ「池明」

しけいしや／や+を〈朱〉「大」：012977

しけいさを〓淑景舎「池明」

修理しき「大」：012987

すりしき〓修理職「池明」

池田本と明融本には、「ころくわん」「しけいさ」「すりしき」に漢字が、「女」に「ムスメ」という仮名が振られている。これらは大島本にはない。渋谷栄一はこれらに注目して、池田本と明融本の親本が同一である可能性を論じている(注4)。この振り漢字・振り仮名がピタリと一致する現象はおよそ偶然とは考えにくく、両者が大変深い関係であることを示す一証左であるといえよう。渋谷が指摘したように同じ親本からの書写であるか、それに準ずる程度の近さであると考えられる。これは本文の一致度とも符号するものである。

さて、以上の事からいえることは、池田本桐壺が親本に対して忠実な書写であったということである。直接の書承関係のない二本がこれほどまでに一致するというのは、そのそれぞれが、親本に対して忠実であろうとしたからとしか考えられない。明融本桐壺は定家本の臨模本であり、親本に対して複製を作るが如き忠実な書写本と考えられる。池田本桐壺はその明融本とほぼ同様の忠実さで書写・校正されたと考えないと、これほどの一致はあり得ないであろう。

では、二人の池田本書写者のうち、甲の書写態度が、少なくとも桐壺においては、親本に対して非常に忠実なものであったことを示していることから、他の甲筆書写巻についても、同様のような見通しのもとに、その書写態度を考えることは許されるだろうか。

同じ書写者であっても、巻によってその書写態度が変わることはあ

り得ないことではなからう。たとえば参照した親本が、巻によってその由来や質の異なるものであった場合、その本文に対する書写者の評価が変わりうると考えられるからである。

なお、他の巻における考察が必要である。次節では、帚木巻について検討する。

## 二、帚木巻の書写態度

### (1) 明融本との異同

いわゆる明融臨模本八帖と池田本甲筆書写巻で共通する巻は、池田本で欠巻の柏木および乙筆である浮舟を除く六帖である。それらの巻を詳細に調べてみると、桐壺と同じ甲筆書写巻でも、帚木や若菜上などは、おむね近い本文を伝えつつ、桐壺でみたほどには、親近性を有していないように見える。

以下、本節では帚木について検討してゆく。

【資料4】 帚木における池田本・明融本の異同の例(一部。番号は別

本集成。)

021255 (池) なみたこほれぬれは

(明) なみたこほれそめぬれは

021770 (池) おもてふせにや見えんと

(明) おもてふせにや思はむと

022142 (池) あたことをも

(明) あた事をもまことの大事をも

022565 (池) みつへきはひなりしかは

(明) みつへかりしけはひなりしかは

022620 (池) 事にふれておもへるけしきも

(明) 事にふれておもへるさま (〓けしき) も

022706 (池) さきまじる花は

(明) さきまじるいろ (〓花イ) は

022900 (池) しもには

(明) しもの中には

024103 (池) まろはこゝにね侍らむ

(明) まろは、しにね侍らむ

024916 (池) めもをよはぬ御かきさまもめもきりて

(明) めもをよはぬ御かきさまもきりふたかりて

025262 (池) たれも〓思ふらむと

(明) たれも〓みるらむと

以上、ほんの数例の掲出ではあるが、帚木においては池田本と明融本は、確かに近い本文を伝えてはいるが、桐壺ほどの親近性を有していないことが了解されよう。このことは書写者甲の書写態度が桐壺の場合と異なることを示しているのか、親本本文の違いを示しているのか、あるいはその両方かであろう。

また、次のような池田本の独自異文もある。

【資料5】池田本〈独自異文〉の例 (\$はミセケチを表す。)

023621 (池) 人ちかならむなん

(明) 人ちか、らむなむ (後む\$ル)

023736 (池) しのひてものいひゑ (多\$)

(明) しのひて

024650 (池) わかれいり給

(明) わかれ給

ここで、現在確認される写本の中では池田本帚木に最も近い本文を伝える東洋大学蔵伝阿仏尼筆本(以下「高木本」)に注目し、池田本帚木の書写態度を考える手がかりとしたい。

## (2) 高木本との親近性

さて、東洋大学図書館に、伝阿仏尼筆帚木卷一冊が所蔵されている。以下、本稿では旧蔵者名から高木本とよぶ。この高木本は、昭和四一年に石田穰二(注5)によって紹介されて以降、長らく研究対象としてとりあげられることもなかったが、源氏物語本文研究の見直し機運の高まりとともに、近年になって濱橋頭一や上原作和らによって注目されることとなった(注6)。特に上原はこの高木本が、「伝明融等筆『源氏物語』の依拠した、「青表紙本成立以前の本文(すなわち宗本)」を保有する可能性が大」な、「現存青表紙本系統諸本の最善本」だという、重要な発言をしている。一方、濱橋は上原論に対して「見解の擦り合わせに多少困難を感じる点がある」として慎重である。

ところで、この高木本は大系頭注に時折本文の引かれる「紀州家旧蔵本」であるとされてきた。詳細は別稿を準備中であるので省くが、大系および島津久基『源氏物語講話』に引かれた本文の吟味、および、山岸徳平らによる「紀州家旧蔵本」に関する発言を勘案するに、高木本と「紀州家旧蔵本」は同じ本である可能性は皆無とはいえないが、別の本である可能性が高いこと指摘しておく。

論者も実際に高木本を閲覧・調査した結果、両本本文の親近性がきわめて高いことを確認した。たとえば、先にあげた(【資料5】)池田本独自異文の例、実は三箇所すべてにおいて、高木本が同一の本文を伝えている。つまり高木本の伝える本文によって、先の例は、正しく

は池田本の独自異文ではなくなるのである。

別稿において、高木本の本文訂正を弁別し、さらには本文の極めてよく似る池田本を使つて、高木本の親本本文の再建を試みた(注7)。ここでは逆に高木本を用いて池田本帯木を復元してみる。池田本訂正箇所を、高木本で復元できるのは以下の通りで、五五箇所のにほる。

【資料6】池田本・本文訂正を反映した本文再建(一部)

凡例

別本集成番号 (池) 池田本本文↓再建本文  
(高) 高木本本文

- 020325 (池) おやと/や+な↓おやなと  
(高) おやなと
- 020329 (池) もれる/十↓こもれる  
(高) こもれる
- 020376 (池) 思くたさむ/思+ひ↓思ひくたさむ  
(高) おもひくたさむ
- 020377 (池) まことにかと/\$↓まことかと  
(高) まことかと
- 020562 (池) かんたちめよりも/は<削>も↓かんたちめよりも  
(高) かむたちめよりも
- 020570 (池) いやしからぬ/ぬ+か↓いやしからぬか  
(高) いやしからぬか

ただ、残念ながらこの二本の比較からは、復元を保留せざるを得ない箇所も一六例存在する。

【資料7】池田本・再建保留の本文訂正(一部)。±は補入記号のない補入を表す。

- 020413 (池) すくれたることは/こ\$  
(高) すくれたるとは/こと<削>と
- 020727 (池) の給にやとや/給+ふ、後や\$  
(高) のたまふにやとや
- 021019 (池) くちをしからぬ/\$お  
(高) くちをしからぬ
- 021149 (池) 山さとの/\$  
(高) 山さとの/\$<薄濃>
- 021324 (池) させるやうなからん/か\$  
(高) さるやう
- 021583 (池) あはれも/も±又  
(高) あはれも
- 021837 (池) 五六日/五±日  
(高) 五六日

しかし、この一六例こそが、恐らく両本に直接の書承関係がないという点、親本も異なるものであったことを推測させてくれる。

なお、一例め及び四例目については、池田本・高木本の両本に本文訂正があるので保留としたが、両本とも親本「すくれたることは」「山さとの」であったのではないだろうか。ただし、親本の段階で訂正があるなど、乱れが生じていたことを示しているものと考えられる。親本の本文訂正をそのまま書写した箇所とみてよいのではないだろうか。

また、六、七例めの池田本訂正後本文「あはれも又」「五六日」の本文は今のところ池田本の独自異文である。補入記号のない補入についての考察が必要であるが、いまだ結論に至っておらず、後考を期し

たい。

(3) 帚木についてのまとめ

桐壺で池田本と明融本とがそうであったように、帚木において高木本と池田本は非常によく一致する。直接の書承関係がないと考えられる二本がこれほどに一致するというのは、両本がそれぞれの親本に対して忠実な書写しているからに他ならない。

桐壺における考察とあわせて、帚木でもこのような結果となったことから、池田本、少なくとも甲筆書写巻については、本文訂正を本行に加味して読むことで、その親本の本文がほぼ再建できるという見通しが許されるものと考えられるのである。

### 三、甲筆書写巻全般の書写態度

(1) 模写本かどうか

さて、前節まで、桐壺・帚木という巻別の考察をおこなった。それによって池田本が親本の本文をよく残していることがわかったが、では、最後に、池田本甲筆書写巻が親本の模写本といえるかどうか、即ち、親本のいわば物理的な性質をどの程度残しているかについて、検討したい。

甲筆書写巻には、丁代わりの部分に衍字が散見される。たとえば、総角には

．．．．．ひめ宮はおほ」(64オ)  
おほしなけかるれと．．．

とあって、64オモテ最後の「おほ」は擦り消されている。

また、桐壺にも二箇所

．．．．．たうりをもうし」(19ウ)  
うしなはせ給ひ．．．

．．．．．は、宮内の」(30オ)  
内のひとつきさいはらになん．．．

とあって、前者は丁末の「うし」をミセケチにし、後者は丁始めの「内の」をミセケチとしている。

字詰め行詰めに注意しながら模本を作成しようとするのであれば、次丁の始めの文字を、前丁の終わりに書いてしまうことはあるまい。特に総角の例や桐壺の二例目などは、丁をめぐらないと次の文字が見えないのであり、その文字を前丁最後に衍字するというのは、明らかに模本を作成しようとしていたのではないと考えられるのである。

しかし、この衍字そのものが親本にあった場合、そしてそれを忠実に書写したということになれば、上記の考えは否定されてしまうであろう。では、以下のような例はどうか。

．．．．．のたまひてた、なら」(若紫7オ)  
すおほしたりかやうにてもなへて  
ならずもてひかみたること．．．

実は7ウラ1行目の「おほした」は「もてひかみ」と書いたものを削った上に書かれている。つまり「た、ならず」「なへてならず」の

「ならず」によって生じた目移りによって、「おほしたり」と続けるべきところに次行の「もてひかみ」を書いてしまったのである。模本なのであれば、丁をめくって新しく書き始める一行目に、親本の二行目の文字を書いてしまうことは恐らくないであろう。

池田本は親本の本文をかなりよく残してはいるが、模本ではない、ということである。そして、衍字や削訂は親本の写しではなく、書写の際の不注意を校正したものと見るべきである。

## (2) 表記

ここでは、親本の表記をどの程度受け継いでいるのか検討したい。

先に述べたように、桐壺において、明融本と、その字母はともかく漢字仮名の違いについてはかなりの部分で一致をみる。これは偶然ではなく、親本の漢字仮名の違いをかなり忠実に書写しているものと思われる。

ただし、先に見た衍字の箇所、桐壺の一例目、先の「うし」は字母「字志」で、後の「うし」は「字之」である。桐壺の二例目も、「内能」「内乃」と、字母が違っている。ほかにも、若紫41才末とウ始の衍字「おほとこのこも」では、「ほ」「こ」の字母が異なっている。つまり、字母までは忠実に写していたわけではないことがわかるのである。

## (3) 削訂・補入・傍記

池田本には多くの削訂が見られる。削られた字が辛うじて読める場合もあり、池田本の書写態度を知る上で重要である。特に多いのは一字飛ばして書写した場合の削訂である。

たとえば桐壺5ウ4行目「をもり給て」の「給て」は、もと「て」

とあったのを削った上に書かれている。つまり、はじめは「おもりて」と、「給」を飛ばして書写してしまったのである。書写時にそれに気付いて削訂したものと思われる。

そうした例が各巻に多く見られる。親本に忠実に書写しようという意識がありながらも、急いでいたのか書写者の性格なのか、やや注意に欠けるところもあつたようである。

そのことは補入の多さからもいえる。補入については、親本のままに写している箇所もあるかもしれないが、模写本でないことが明らかであるので、むしろ、書写後の校正時に判明した脱字の訂正と見るべきであろう。一字の補入から数行にわたる補入まで、さまざまであるが、原則としてその補入と本行をあわせて、親本の本文を伝えたものとみるべきである。

なお、補入には補入記号が付されるのが通例であるが、まれに補入記号のない補入が見られる。この二つの違いについて、その原因はまだ不明である。今後の検討課題としたい。

イ本注記や引歌などの傍記も多い。これらは親本の姿を伝えているものと思われる。朱合点や奥入所載の引歌注記などが他本とよく一致することからわかる。ただし特に玉鬘十帖前後に多く見られる細字の注記は、明らかに本行と筆跡も異なり、後世のものと思われる。

また、傍記の中には以下のような例もある。

お

・・・よの人のいふめるをそろしき

かみそつきたてまつりたらんとは・・・(総角33オ3・4行め)

「をそろしき」とある「を」に「お」の傍記がある。ミセケチ記号はない。「おそろし」は総角に六例。他の五例はすべて「おそろし」であ

り、「をそろし」とするのは当該例のみである。他本をみても、保坂本を除いて「おそろし」を表記するのが通例である。先に述べたように、池田本においては、字母はともかく仮名遣いは親本の姿を伝えているものと見られる。親本の本行は「をそろし」とあったのであろう。それをそのまま書写したものと思われる。「お」の傍記が親本に由来するものであるのか、親本にはなかったものを書写者が書き込んだものなのか、はつきりとはわからない。

## 結

以上のことから、池田本甲筆書写巻の書写態度について、改めてまとめてみたい。

まず、原則として親本に忠実な書写であること。ただし模写本を作成したということではなく、字詰め行詰めにとられない書写であり、表記についても、仮名遣いに関して一定の枠はあるが、これも比較的自由な書写であることがわかった。また、削訂は書写時に気付いた誤写の訂正であり、補入・ミセケチは原則として校正時に気付いた誤写の訂正である。これらのことから、親本の本文を忠実に伝えようとする書写者の姿勢がうかがわれる。

これらのことから、原則として池田本の本文訂正を本行に加味して読むことで、池田本の親本の本文がほぼ再建できると考えられる。ただし先に触れたものも含めて、いくつかの傍記、補入記号の無い補入の意味など、解決しなくてはならない問題も残した。

ただ、まだこれは見通しの段階だが敢えて述べるとすれば、書写者甲は、親本本文を評価しながら書写することをしていないと考えられる。親本における本文訂正あるいは対立する本文の併記などといった、書写の際に窮するような箇所については、そっくりそのままかどうか

はわからないが、それを評価せずに、そのまま書写したのではないかと考えられる箇所が存在した。それらについては今後も引き続き精査をおこない、機会を改めてまとめることとしたい。

鎌倉期写本の親本本文再建は、はじめに述べたように、未だ見つからない平安期写本の本文に近づく作業であるとともに、鎌倉初期の本文整理事業の解明にも資するところが大きい。

現在の源氏物語本文研究は、平安期本文どころか、定家、親行の時点にすら遡りきれていないといえる。「青表紙本」の概念に疑義が提起され、「青表紙本原本」の再建をめざした池田三系統論は、その点において振り出しに戻ったといえるし、河内本の校訂方針も見極められてはいない。

源氏物語の本文研究は、依然、途上にある。池田三系統論の批判的再検討とともに、個々の写本のより深い研究が今後ますます必要だと考えられるのである。

そのような中、特に池田本の書写者甲の書写態度について、ある程度判明したことで、鎌倉期写本の三六巻について、一世代遡り得る見通しができた。桐壺においては、明融本と池田本のそれぞれの親本が同一の本ではないかと思われるほど高い親近性を有していたが、帚木においてはそうでもなかった。このことが意味することを含め、特に池田本の親本についての考察は今後の課題としたい。

## 注

- (1) 阿部秋生「源氏物語の本文」(昭61 岩波書店) など。
- (2) 中村一夫「源氏物語の本文と表現」(平16 おうふう)
- (3) 岡寫偉久子「源氏物語伝二条為明筆本―その書誌的総論」(『王朝文学の本質と変容 散文編』平13 和泉書院)
- (4) 渋谷栄一「定家本「源氏物語」の生成過程について―「桐壺」を中心として―」(『源氏物語とその前後 研究と資料』古代文学論叢第14輯 平9 武蔵野書院)

- (5) 石田穰二「貴重書から 伝阿仏尼筆紀州徳川家旧蔵本源氏物語「帚木」」(図書館ニュース)昭41・10 東洋大学附属図書館)
- (6) 上原作和「青表紙本『源氏物語』」伝本の本文批判とその方法論的課題―帚木巻における現行校訂本文の処理若干を例として」(中古文学)55 平7・5、上原作和「青表紙本『源氏物語』」原論―青表紙本系伝本の本文批判とその方法論的課題」(論叢源氏物語)4 平14 新典社、濱橋顕一「伝阿仏尼筆本帚木の本文について」(論叢源氏物語)1 平11 新典社)
- (7) 大内「高木本(伝阿仏尼筆帚木巻)とその本文」(中古文学)75 平17・5)

※貴重な所蔵資料の閲覧にあたってご高配賜りました東洋大学附属図書館、天理大学附属天理図書館に、記して感謝申し上げます。